

第一回公開研究会

「正統と異端」研究会をめぐる

河野有理

三月五日に開催された公開研究会の内容を以下に紹介する。但し、その内容の全面的な紹介は、紙幅の関係もあり、また当日の質疑応答も踏まえた形で、別稿を準備中であるため、控えることにする。ここでは、その主題と、なぜその主題を取り上げようと思ったのか、その動機を中心に簡単に述べたい。

公開研究会では、丸山の「正統と異端」研究会について、特に八〇年代後半の未公開の資料を紹介しながら、その意義について考察した。私見によれば、この資料を分析することで、丸山の学問的展開について従来支配的であった見解に、疑いを投げかけることができる。こうした見解が流布・浸透するに当たっては、丸山自身の責任も大きい。たとえば丸山はかつて次のように書いている。

日本政治思想史というものが私の本来の場で、他は極端にいえば夜店を出したようなものです。「……」そこで一日も早く夜店をたたんで本来の仕事に戻りたいと多年思っていたわけでございます。幸い

にしてその後非常に優秀な政治学者がたくさん出てまいりましたし、私も多年夜店の領域ではものを書かないよう努力して来ましたが、どうやら夜店をたたむことがほほできました。それでも「丸山政治学」などという他称の虚名が今でも往々用いられるので閉口している次第でございます。（『原型・古層・執拗低音』（一九八四年）『集』12・一一〇―一一一頁）

ここで丸山は「丸山政治学」を「他称の虚名」と断じている。「夜店」としての政治学は早々にたたみ、自分とはつくに「本店」としての日本政治思想史へと回帰したはずだ。いまさら「丸山政治学」の存在を云々されるのはまっぴらだ。そうした意識が垣間見える文章である。「今でも」ということは、これが発表された一九八四年の時点でも、六〇年安保以降の自身の研究態度についてそのように総括を加える必要を感じるほど、「丸山政治学」の「虚名」は流布していたのである。ちなみに余談であるが、先日インターネット上で、その年齢や経歴か

ら言つて丸山の学問的警咳に親しく接したことがあるとは思えないある人物（元国際政治学者であり、本原稿執筆時の東京都知事選挙の候補者である）について、「丸山政治学の徒」である旨の喧伝が、否定的なニュアンスにおいて、なされていた。してみると、その「虚名」は依然として健在なのであろう（もつとも、「学派」と属人的な関係とを峻別した丸山の意味においてそうである可能性は、否定できないのであるが）。

こうした「虚名」とそれにともなうイメージはともかくとして、では丸山は本当に政治学的な関心を失つたのであろうか。「丸山政治学」なるものは本当に存在しないのだろうか。そうとばかりはいえないだろう。「思想史」と「政治学」を截然と分けることによつて見えなくなつてしまうものがあるのではないか。丸山が「政治」についてどのように考えたのか、たとえば、そうした問いはその一つであるように思われる。この点を考えるにあたり手がかりになりそうなのが、今回紹介した八〇年代後半の「正統と異端」研究会であるように思う。

丸山は「正統」という言葉によつて、Orthodoxy と Legitimacy という二つの問題を同時に論じようとしていた（区別する場合にはそれぞれ〇正統とⅠ正統と表記された）。もつとも、丸山の関心の焦点には時期によつて濃淡がある。例えば、当初六〇年代の研究会ではOrthodoxy にあつた関心の比重は、八〇年代の研究会に至ると、明らかに Legitimacy の方へと傾きを見せている。それにしたがつて同一の対象に対するアプローチも変化した。六〇年代の研究会では、専ら「疑似〇正統」の問題として把握されていた明治日本の「國體」は、

八〇年代には日本国憲法（戦後日本の「國體」）や、（独立宣言によつて基礎づけられる）アメリカの「國體」（Ⅰ）と比較可能な「Ⅰ正統」として捉え直されている。政治体制を、その政治的權威の Legitimacy の視点で比較検討しようという姿勢が、鮮明に現われているのである。

丸山に起きたこうした変化と、ほぼ同時期に起きた北米におけるいわゆる政治哲学の「規範論的転回」、あるいはユルゲン・ハーバマスらによる「正統性の危機」の問いとを重ねあわせ、相互の関係を検討することは、興味深い研究課題となるだろう。また、文芸評論家の江藤淳や法哲学者長尾龍一による、「占領体制」論と、それが伴つた日本国憲法論の手續きの正統性に関する問い直しの動きは、明らかにこの時期の丸山を刺激していた。研究会の資料からうかがえるのは、同時代的な問題関心に触発されながら、「政治」についての原理的な問いに挑戦し続けようとする丸山の姿である。

もちろん、Ⅰ正統 (Legitimacy) に注目して政治を考えるこうした態度が、丸山においてこの時はじめて生じたわけではない。『現代政治の思想と行動』増補版のいくつかの注にそうした展開はすでに予告されている。また、丸山もこうした問題を、明確に自身の『政治の世界』（一九五二年）の延長線上にあるものとして意識していた。研究会資料は、〈夜店〉としてすでにたんだと宣言したはずの「丸山政治学」（『政治の世界』はその代表作と見なされてきた）について、粘り強く、執拗に考え続けようとする丸山の姿を、垣間見せてくれるのである。

文部科学省 平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「20世紀日本における知識人と教養
—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」

第1回 公開研究会

「正統と異端」研究会をめぐって

講師：河野 有理氏

(首都大学東京 准教授)

2013年3月5日 (火)

時間：14:30～16:00

会場：東京女子大学 24101 教室

申込不要・入場無料

問合せ先：東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター
tel. 03-5382-6817 fax. 03-5382-6120
e-mail. marubun@lab.twcu.ac.jp
東京都杉並区善福寺2-6-1

○講演の概要

「正統と異端」研究会は、『近代日本思想史講座』第二巻（筑摩書房）刊行のために組織された研究会です。それは同講座が企画された直後の1950年代後半から、丸山の死の直前の1990年代の初頭まで、断続的に続きました（同講座第二巻は結局刊行されませんでした）。そこでは何が問題となり、どんなことが話し合われたのでしょうか。そうしたことを、本文庫所蔵の資料も用いながら、考えていきます。その際、特に以下の点に留意したいと思います。第一に、この研究会が共同研究だったことです。いわゆる「丸山思想史」との関連でのみ、この研究会を考えるべきではないでしょう。参加者（丸山の他には石田雄や藤田省三がいました）同士が、どのような点で問題関心を共有し、またどういった点では意見を異にしていたのでしょうか。第二に、研究会が続いた期間が長いことです。問題関心は持続しつつも、重点の移動は当然にあり得るでしょう。それはどのようなものでしょうか。また、時代環境のどのような変化がそこには反映しているのでしょうか。

○講師プロフィール

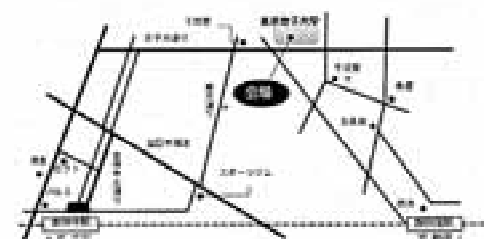
首都大学東京・都市教養学部法学系准教授。専攻は日本政治思想史。著書には『明六雑誌の政治思想 阪谷素と「道徳」の挑戦』（東京大学出版会、2011年）がある。

○丸山眞男文庫とは

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がびろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

○「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」事業とは

東京女子大学は、2012年度より、丸山眞男文庫の資料に基づいた研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を開始しました（文部科学省平成24年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択プロジェクト）。このプロジェクトは5年間にわたって二つのテーマ（「20世紀知識人の教養と学問—丸山眞男文庫を素材として—」および「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」）を軸として、研究を進めてゆきます。



JR西荻窪駅北口より徒歩約12分。
バスの場合は西荻窪駅北口より吉祥寺駅
行きバス/JR・京王井の頭線吉祥寺駅
より西荻窪駅行バスで「東京女子大前」
下車。